

イギリスのなかのインド

近藤 治

一九世紀後半のヴィクトリア時代に建造されたダルバール・コート迎賓館は、ロンドンの官庁街ホワイトホール街にあるインド省の呼び物の建物であり、二〇世紀の初めにかけて数々の国家的祝典や国賓歓迎会の行なわれたところとして有名である。一九〇二年のエドワード七世戴冠記念祝典もここで挙行された。しかし第二次世界大戦後インド、パキスタンが独立し、インド省が廃止されるとともに、その存在の影は薄くなった。そして一九六〇年代にこの一角の再開発計画が打ち出されるころからは使用されることもなくなり、荒廃の度が進んでいった。それは、インド亜大陸を植民地として長らく保持し、これを柱軸にして世界帝国を築いたイギリスの栄光と衰

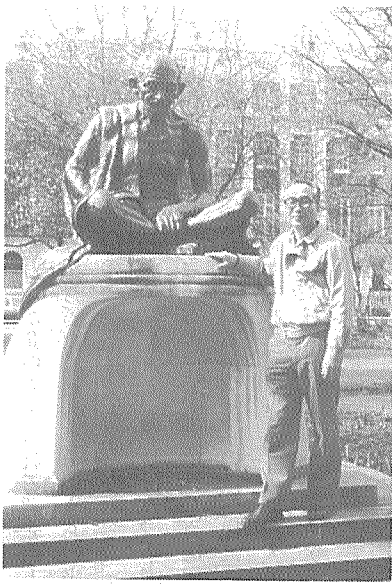
退を象徴しているかの如くであった。

しかし幸いにといふべきか、この再開発計画は見なおされ、迎賓館は保存されて一九八四年から修復改装作業が始まった。そしてこのほど五七五万ポンド（約一五億円）を投じた床、壁、天井等の華麗な内装の修復工事が完了し、最上階には新しく事務所も付設されたという。大英帝国の遺産の再評価と補強である。この迎賓館を飾る装飾の圧巻は、その壁面に刻り込められた二八の胸像と八つの立像である。これらの胸像は初代ベンガル総督クライヴや一九世紀前半のコーンウォリス総督など、植民地インドの建設と経営に功績のあった人物の形象である。植民地インドのシンボルの再現というように皮肉な見方をするのができなくもないが、そういう声はついで聞かなかつた。だがインドやパキスタン等の人々はこのらの胸像を、そして再び姿を見せた迎賓館そのものをもどのような気持で見るのであるうか。

彫像のことではいうならば、ホワイトホール街南詰、国会議事堂前の広場後方には大きなキャニング像が広場前方のチャール像と対をなすような形で立っている。キャニングは一九世紀半ばのいわゆるセポイの反乱当時のインド総督で、反乱鎮圧の最高責任者。その功績でこの

銅像が建立されたことは間違いない。だがこの銅像の方には彼の名前以外の刻文は一切残されていない。インド、パキスタン独立後にそれらは削除されたのであろう。

クライヴやキャニングの彫像とは違って、インド亜大陸の指導者の像をロンドンで見つけるのもさして困難ではない。私を通っているロンドン大学東洋アフリカ学部の北、歩いて五分のところにタヴィストック広場があるが、その中央部に設けられたものがガンディーの坐像である（写真参照）。高さ約三メートル。瞑想中の坐像のコンクリート製基壇正面には、ただ「マハートマ・ガン



ディー 一八六九—一九四八」とのみ刻されている。

ガンディー像から少し離れた同じ公園内にヨーロッパの樹が植えられており、その幹近くには次の文を刻した小さな銅碑が立てられている。「このヨーロッパパナはインド首相パンデイト・ネール一九五三年六月一三日この公園を訪れし際、聖パンクラス区評議会がマハートマ・ガンディー像建立の用地を提供せしことを記念して植樹された」刻文によって、ガンディー像がこの公園を管轄する聖パンクラス区評議会の承認のもとに建立されたことが分る。過日もこの公園を訪れると、幹の太さが四〇センチメートルを越えるまでに成長したヨーロッパパナは赤銅色の葉をいっぱい茂らせていた。

イギリスのなかにインド（広義の用法で、インド亜大陸すなわち南アジアと同義）を発見しようとする姿勢をとっていけば、ロンドンの街角を歩いていても、インド的なものは自然と目に飛び込んでくる。しかし最もよく目立つものは何といっても生きた人間そのもの、つまりインド亜大陸出身の人々であろう。大学、図書館、官庁、銀行、商店、交通機関というように広い職種にわたって広義のインド人、すなわちインド亜大陸出身の人々が進出している。とくにロンドンはその様相が甚しい。

イギリスつまり連合王国の人口五六〇〇万人、そのうち五パーセント、二八〇万人が非白人とされる。非白人の約半分がインド亜大陸出身者だ。残る半分のうちの半分、つまり非白人の四分の一が西インド系ないし、ギニア系黒人。他の四分の一がアフリカ人、アラブ人、中国人ないし混血者ということになっている。アメリカの黒人問題は非常によく知られているが、彼らの人口比は一・二パーセント。これと対照すれば、イギリスの非白人の割合は決して小さいとはいえない。にもかかわらずアメリカの黒人問題に比べて、あまりにも問題とされてこなかったのは何故だろうか。非白人の主要部、少くともその半分が広義のインド人で占められていることと関係はないであろうか。

イギリスの非白人は全国に均等に分散しているのではなく、ロンドン、リヴァプール、マンチェスター、ブラッドフォードといった大都市に集中的に居住している。今年六月に行われた総選挙に際して、全国で五二選挙区（小選挙区）、うちロンドンで一四選挙区が一五パーセント以上の非白人系有権者をもつとされた。ロンドンのある選挙区では四六パーセントを占めるところがあるという。ノッティンガムの選挙区では黒人女性の労働党候

補者が、労働党は人種差別主義的であり自分は黒人のために闘うと演説し、途中で候補者からおろされてしまった。彼女の代りに候補者となったのは、パキスタン系の公認会計士であり、こういうところにもイギリスのかかえる非白人問題の難しさが表われている。結局この候補者も落選した。

一方ブラッドフォード市は人口四六万六〇〇〇のうち、一五パーセント弱の六万八〇〇〇が非白人、その大半がインド系移民である。一〇年後には市の人口四七万七〇〇〇の二〇パーセント弱、九万三〇〇〇の人口が非白人によって占められると予想されている。しかもブラッドフォードは他市とは対照的に児童生徒数が増えつづけており、全学齢児童数六万七五〇〇のうち二八パーセント、一万八九〇〇人が非白人系、主としてインド系の児童によって占められているのである。同市の伝統産業であった繊維工業が今日では衰退しているため、失業率が政府発表で一四・二パーセント、市当局発表で一八・四と異常に高いことも特徴であり、人口構成の特異性と深く関係している。故地を離れイギリスに移住したインド亜大陸出身者の多くにとって、その生活、居心地は決して良好とはいえないのである。

最近、オックスフォードでガレージ業を営むインド人が他人を雇って自分の娘を駆込み寺ならぬ駆込み寮から無理矢理誘拐させようとし逮捕されるという悲劇的事件が起った。二二歳の娘が既婚のパキスタン人青年と恋愛し、双方の両親から咎められると、娘は遠く離れた西方デヴォン州の海港都市バースステープルにある駆込み寮に逃げ込んでしまった。途方にくれたインド人の両親はオックスフォードの資産を処分してインド帰国を決心し、しかもインド娘の結婚相手も見つけて、娘を無理矢理空港まで連れ出し帰国しようとしたのである。駆込み寮近くの路上での誘拐計画が失敗すると、雇傭された実行未遂者四人とともに父親も逮捕されてしまった。恋は実らず、しかも家庭は完全に破壊されてしまうという最も傷ましい結末を迎えたこの事件は、イギリスに居住する多数のインド亜大陸出身者の身の上起こる様々な出来事のただの一事例かもしれない。イギリスのなかのインド社会（広義）にも国境が敷かれ、宗教、カースト、社会集団の壁がめぐらされ、決して一様ではない。

イギリスのなかのインド人の心性に見られる共通項は何であろうか。私が思うに、それは蓄財と教育の二項であろう。それはイギリスに、そして広く欧米に居住して

きたユダヤ人の心性に驚くほど近似しているように思われる。古い文明を誇りながらも、不安定な異質社会に身をおく者にとって、最も頼りになるものは蓄財と教育であろう。六月末に発表された、低所得者層が多いとされるロンドン市中心部（イナナー・シティー）居住者の子弟の中等普通教育（Oレベル）五科目上位成績（A・A・Cランク）及第者の割合を見ると、インド人子弟が二〇・七パーセントでトップを占め、以下パキスタン人子弟一六・一パーセント、中国人子弟一六パーセント、アフリカ人子弟一四・二パーセント、アイルランド人子弟一一・四パーセント、イギリス・スコットランド・ウェールズ人子弟九・四パーセント、西インド系黒人子弟四・六パーセント、バングラデシュ人子弟三・六パーセントと続く。バングラデシュ人子弟の上位成績及第者の割合が異常に低いのは、彼らの多くがバングラデシュ難民の子弟であり、彼らにとっては教育よりもまず生活を確保していくことに最大の課題があるからであろう。これらの数字から明かなように、インド・パキスタン両国出身者がいかに教育に意を注いでいるかが明瞭に分る。

六月総選挙前の国会議員中ユダヤ人出身者は三〇人。総サッチャー内閣の閣僚中四人がユダヤ人といわれた。総

選挙後の国会議員および新内閣中に占めるユダヤ人の数はまだ分らない。一方インド亜大陸出身者はどうか。閣僚はもちろん零。国会議員も寥々たる数であろう。しかし将来どう変化するか軽々にはいえない。

イギリスのなかのインド、そしてインド人。この問題は歴史学的分析にとっても、社会学的分析にとっても非常に大きな広がりをもった、かつ重い問題なのである。